ヘルペスウイルス感染に関する研究
（分担研究報告書）

分担研究者　吉　野　亀三郎
研究協力者　川　名　　尚

ヘルペスウイルスが妊婦に初感染を起こしたときに胎児に諸種の奇形を発するという報告がある一方，また妊娠中の２型ヘルペスウイルス初感染が妊娠20週以内に起きると流産が多く，20週以後の場合は早産が多いという米国の統計がある。この点を多くの産婦について調べて日本人の場合はどうかを知ることがこの研究の目的である。

前年度の研究の結果判明したことは妊娠中の初感染例は少くとも血清学的調査による限り数パーセント以下であり，その中のまた僅かな率のものに奇形発生があるとすると，検査母数を夥しく増やさなくてはならないということであった。それには，われわれだけが調べる以外に，もっと多くの病院その他の施設で広範囲に統一された方法でこれを行なうことが必要という認識に到達した。これを実現するためには，比較的僅かな設備と労力で多くの検査材料を取り扱いうる方法の確立とその一般への教育が必要となってくる。本年度はこの目的で，従来用いられた諸種の方法の中から実用的なものを選び，さらに工夫を加えてどこの検査室でも行ないうる術式を設定しそれに基いて予備的な検査成績を調べた。

東大病院産婦人科では646の妊婦について免疫粘着法ＩＡＨＡによりヘルペスウイルス（ＨＳＶ）抗体を検出し，妊娠初期中期後期の血清について調べたが，初期から後期にかけての陽転は１例しか認められなかった。またマイクロプレート法中和を著しく簡略化することに成功し，これを用いて国立仙台病院から送られた妊娠初期中期後血清を補体＋と－で中和テストを行ない，100人分検体300のうちで，妊娠中陽転した例２，補体要求性中和抗体で初感染を疑われた例３を得た。その分娩児については目下追求中であるが，まだ異常はない。

この調査では１型ＨＳＶ抗体を測っているが，計らずもこの研究中，マイクロトレイに直接１型吸収源を加えるという新法で２型ＨＳＶ特異抗体がかなり正確に計れることが判ったが，それによると従来２型特異抗体と考えられていたものは，大方は１型交差抗体だったということが判ったので，この吸収法をさらに実用に適するように鋭意工夫しつゝある。

また東大産婦人科に於いては妊娠中の再発性ヘルペス症患者３例を見ており，そのうち２例は２型で１例は１型であるが，そのいずれの場合も出産児の奇形はなかった。このような場合も考慮にいれて，上述の一般教育施行に関しては血清診断のみならず，ウイルス分離固定法も併せて行なうことが必要と思われる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

ヘルペスウイルスが妊婦に初感染を起こしたときに胎児に諸種の奇形を発するという報告がある一方,また妊娠中の 2 型ヘルペスウイルス初感染が妊娠 20 週以内に起きると流産が多く,20 週以後の場合は早産が多いという米国の統計がある。この点を多くの産婦について調べて日本人の場合はどうかを知ることがこの研究の目的である。